目　次

凡例……iii

I

土左日記……1

一　過去の痕跡との出会い ― ベンヤミンと『土左日記』……3

二　船のなかの「見えない」人びと……17

三　「日記」を書く者 ― ヴィトゲンシュタインと紀貫之……33

四　楫取と船君 ― 逆なでに読む『土左日記』……49

五　仮名文とナショナリズムと ― 『土左日記』の〈虚実〉問題・再考……63

II

蜻蛉日記……79

一　町の小路の女のみちを歩く ― 室生犀星と『蜻蛉日記』……81

二　家父長制と「女の自伝」……93
三　物語るということ ― 道綱母とイサク・ディーネセン……111
四　異形のひと……125

Ⅲ　歴史の理論と物語……141

一　物語の衰退をめぐって ― リクールとベンヤミン……143
二　物語り行為と歴史の理論 ― リクール歴史理論の射程……163
三　歴史の記述を考える ― ベンヤミン「歴史の概念について」……183
四　「物語が消えた……」― 田中小実昌『ポロポロ』……215

あとがき……243

凡　例

・『土左日記』からの引用は東原伸明／ローレン・ウォーラー編『新編 土左日記 増補版』（武蔵野書院、二〇二〇年）による。ただし校注者の言説解釈を示す記号は省略し、ふりがなも適宜省略する。論の必要からそれ以外の校本を用いる場合にはそのむね明記する。

・『蜻蛉日記』からの引用は今西祐一郎校注岩波文庫版（一九九六年）により、そこに踏襲されている柿本奨『蜻蛉日記全注釈』上下（角川書店、一九六六年）の段落区分に従って引用箇所を示す。右と同じくふりがなを省略した場合がある。

・外国語文献からの引用は、日本語訳があるものはその書名等を併記して引用頁を漢数字で挙げる。訳文は既訳を参考にした私訳である。もっぱら訳書に拠った箇所も原書を参照して一部訳語の変更を行なった場合がある。

・第Ⅲ部は外国語文献からの引用が多くなるため、本文内に引用箇所を示すことにし、注に略号などについての説明を付す。

・引用文中の〔　〕は引用者による補足であり、傍点による強調はとくに断らないかぎり引用者による。引用文中の旧字体は新字体に改める。

I

土左日記

一　過去の痕跡との出会い ――ベンヤミンと『土左日記』

『土左日記』の旅も終わり近く、船がいよいよ難波（なにわ）から淀川にはいって、折からの渇水に難渋しつつ川を上っているときの話として、二月九日の段に、

わだのとまりのあかれのところといふところあり。よね・いをなどこへば、おこなひつ。

（萩谷朴『土佐日記全注釈』のテクストによる）

とある。この「米（よね）・魚（いを）など乞へば、行ひつ」とは、はたしてどのような場景なのだろうか。どのような人びとが、ここには描かれているのだろう。

＊

一九四〇年九月、ヨーロッパを席巻するファシズムに追われて、峻険なピレネー山脈の尾根を越え

ながらも、スペインへの入国を官憲に阻まれ自死したヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）は、二十ほどの断章からなる草稿を後世に遺した。「歴史哲学テーゼ」の別名でも知られる「歴史の概念について」である。

前年一九三九年の八月二十三日、独ソ不可侵条約が締結されたとの報に接して、当時パリに亡命中のベンヤミンは、夜も眠られない茫然自失の一週間を過ごしたという。すでに一九三八年三月にオーストリアを、同九月にはチェコ・ズデーテン地方を併合していたナチスドイツにとって、これでいよいよポーランドに侵攻することが可能になった。先の大戦を上回る規模の世界戦争の勃発がついに不可避となった。このような事態に、こともあろうに反ファシズム陣営の砦であるはずのソヴィエト連邦が加担したのである。その政治的・思想的衝撃を受けて、それまで数年にわたる思索を凝縮しながら、従来とはまったく異なる「歴史の概念」を提唱しようとしたのが、その草稿であった。

冒頭チェスの自動人形と「史的唯物論」とを対比させ、クレーの絵に想をえて「進歩の強風」に吹き飛ばされながら過去の破局を凝視し続ける「歴史の天使」のイメージを提示するなど、オリジナルな着想に富むテーゼ群として世評が高いが、しかし読解は一筋縄ではいかない。没後に出版されて以降、ユダヤ神秘主義的な解釈からマルクス主義的解釈にいたるまで、その読解は遺産争いともいうべき相を呈してきたばかりでなく、その思想の混乱や不整合までもが指摘されるなどしている。

そもそもが未定稿である。二つの手書きの草稿と四つのタイプ草稿が遺されているが、それぞれ

異同も多く、校訂そのものが困難である。ただ幸いなことに二〇一〇年に新しい全集版が公刊され（*Walter Benjamin Werke und Nachlaß. Kritische Gesamtausgabe*, Bd.19, Suhrkamp）、これら六つの草稿のすべてが、一部は写真版も付して活字となった。成立途上の草案を記した諸断片も、恣意的な編集から解き放たれて、原状を示す配列にしたがって読むことができるようになった。もっともこの新しい版本は、どの草稿も同等の価値をもつとの判断から、それらを統一して標準テクストを提供することをしていない。とはいえ六つの草稿を比較することによって、従来の校訂版に不備のあることが明らかになった。読みかたにもよるが、細部の変更が全体の理解へと影響を及ぼし、あいまいさを拭い去ったよりシャープな解釈が可能になった。

その解釈を、日本古典文学の読解の場で具体化してみるならどのようになるだろうか。

あらかじめ確認しておこう。新しい「歴史の概念」の必要をベンヤミンに痛感させた従来の歴史の概念、それはまずなによりも、ファシズムとさえ一時的にせよ手を組むたぐいの進歩史観である。理想社会の実現へと向かう歴史の歩みにとって、ファシズムの台頭など一時の「例外状態」（テーゼⅧ—以下従来の校訂版のテーゼ番号による）に過ぎないとし、自勢力の温存と拡大のためにはこれと妥協して憚らない。この立場は現在に多くの犠牲者を生み出してゆくだけでない。過去にかんしても、歴史の進歩にとり有意味とされる事象のみを取り上げて大きな物語を紡ぎだし、意味なきものとされる諸事象は記録から振り落とし、忘却の淵へと投げ込んでゆく。